米田庄太郎の社会哲学——社会学の方法と理想主義——

猪原透

はじめに

米田庄太郎（一八七三—一九四五）は、京都帝国大学社会学講座の最初の担当者として高田保馬をはじめ多くの社会学者を育て、日本における社会学の確立に大きな役割を果たした人物として知られている。また、大正期においては社会的民本主義の立場から精力的な言論活動を展開する一方、都市問題や社会調査に関する先駆的研究を発表するなど、非マルクス主義の立場から社会問題を論じた代表的な学者としても知られている。さらには、京大の同僚であった河上肇の新カント派マルクス主義への接近や、同大学の

学生であった恒藤恭の新カント派法哲学の受容にも米田は直接・間接の影響を与えており^①、大正期の京都における思想動向を考えるうえでも米田は重要な位置を占めていると言える。

福田徳三が「米田君の書かれたものを見ると、もつと本を読まなければならぬと思ふ」と評したという博覧強記ぶりは早くから知られていたが、それだけに米田の思考の全体像を把握することは難しく、米田研究も活発とは言い難い状況が長く続いてきた。しかし、二〇〇〇年前後にかけて著作目録や年譜等が整備されると、それに応じていくつかの注目すべき米田論が発表され、以後、米田をめぐる研究史的條件は格段の充実をみるに至っている。だが、これ

までの研究の多くは米田が社会問題への旺盛な言及を行った一九一〇年代から二〇年代前半までの著作に関心を集中させており、それに前後する時期の著作はほとんど扱われていない。米田の社会的影響力の推移という観点からみれば妥当な選択であるものの、米田の思考の射程を図るためには、改めて米田の思考の軌跡をたどりなおし、最終的な帰結を見定める必要があるのではないだろうか。また、これまでの米田論がごく限られた時期しか扱ってこなかったことは、多くの屈折を見せつつ変化と発展の過程をたどる米田の思想的ダイナミズムを捉えることを妨げてきたように思われる。

以上の問題点を踏まえ、本稿では彼の多様な思考のうち、社会哲学という一点に絞ってその変容を考察したい。米田はその学問遍歴において一貫して「科学としての社会学」と社会哲学の峻別を要求し、前者の確立をもって生涯の課題としたのであるが、米田の思考における後者の比重は決して軽いものではなかった。後述するように米田は、「科学としての社会学」の確立は社会哲学と相まって初めて行い得るという方法的な確信を有しており、その確信は同時代の哲学思潮の批判的検討へと米田を向かわせた。米田の社会哲学は、自然法則を内蔵した社会法則である「エネルギー学」に関心を示した初期、新カント派哲学の影響のも

と「新理想主義」を唱えた中期、そして観念論と唯物論の統一という「第三史観」を掲げた後期と変化を繰り返す一方、そのなかには社会学の方法に対する米田の一貫した関心が流れている。近年、昭和戦時下の思想を大正期からたどりなおし、再検討を加える必要性については広く認識されつつあるが、戦前において非マルクス主義の立場から社会学の方法論を最も活発に展開した人物である米田の思考をたどることは、その事例研究としても有益であると思われる。

一 初期米田の方法論的模索と「エネルギー学」

米田庄太郎は一八七三年二月一日、奈良県で農業を営む八十平の長男として生まれた。地元の小学校を卒業したあと大阪府立郡山中学校に進学するが、翌年には私立奈良英和学校に転校し、一八九一年に同校を卒業している。このころの奈良英和学校には、キリスト教聖公会に属する宣教師ドーマンが着任しており、米田は卒業直前に彼のもとで洗礼を受け、卒業後には秘書を兼ねた通訳としてドーマンの教育・講演活動に協力した。東京三一神学校で行われたドーマンの講義をもとにした著作『比較宗教学』全四巻の翻訳を一八九二年から九五年にかけて手掛けており、これ

が確認されている限りでは米田の最初の著作となる。一八九五年に米田はドーマンの勧めにより渡米、ニューヨークで聖公会の神学校に入学した。卒業後にはコロンビア大学大学院に進学し、ギディングス教授のもとで社会学を学ぶ。さらに一九〇〇年にはフランスに渡り、コレージュ・ド・フランスでタルドの講義を聴講した。一九〇一年一月二月に同志社の招聘により帰国、翌年一月より同志社普通学校の教授となる（一九一四年まで）。一九〇七年に京都帝国大学に社会学講座が設けられると米田は谷本富の仲介により講師として招かれ、以後は京大を拠点に活発な言論活動を展開していくことになる⁵⁾。

留学の経緯から考えれば、米田はドーマンと同じ聖職者となるか、あるいは宗教学者となるのが順当であったように思われる。米田はなぜ社会学者となることを選択したのか。この点に関する明確な証言は残されていないが、米田において宗教と学問（特に社会学）はいずれも人生や世界の全体を把握するものであると同時に、その把握の仕方を異にする点で一種の分業関係にあると認識されていた。「宗教の極意は吾人の霊的生活に即して宇宙人生を味ふことに存し、学問の精神は一定の自然的勢力及び理法に攝して宇宙人生を理解することにある⁶⁾。こうした「霊的生活」と「自然的勢力及び理法」という二元論的な発想からすれば、社会

学とキリスト教は排他的な関係というより、むしろ相互補完的な関係にあったと見るべきであろう。アメリカに留学していた時期には「詩人にならうかと思た」と後に回想しているように⁷⁾、米田は「科学としての社会学」の確立を目指す一方で、自然法則に還元し得ない、人生の倫理的・審美的価値にも強い関心を抱いていた。

米田の思想形成においてキリスト教と並んで重要な意味をもったと考えられるのは、アメリカ留学中に出会った企業家たちである。米田の留学中、折しも日清戦後の産業勃興期を迎えた日本の企業家はたえず海外旅行を試み、輸入すべき技術について考えを巡らせていた。米田はその語学力を活かして彼らをニューヨーク各地の企業や工場に案内し、またニューヨークに研究所を開いていた高峰讓吉（アドレナリンの発見者）の助手をすることで滞在費を稼いでいた⁸⁾。これらの経験を通して米田は科学や技術への認識を深めていったのであるが、それは同時に、日本の「西洋化」の浅薄さ、すなわち西洋文明の精神的・観念的要素に対する理解の不足を米田に痛感させる契機にもなったのではないかと考えられる。米田がアメリカを離れ、タルドの社会学を学ぶため渡仏した一九〇〇年はちょうどパリ万博が開催された年であったが、そこでは「社会経済」展示が独立したパビリオンとして設けられ、盛況を博していた。米

田は帰国後に『労働世界』のインタビューに応えて、この展示を引き合いに出しつつ、日本の内国勸業博覧会でそのような展示が行われないことを「誠に遺憾」と述べている¹⁰。このように日本の現状を意識しながら西洋での生活を長期に渡り送ることを通して、西洋文明を大掴みに類型化し、その類型比較を通して日本の文明的状況を把握するといふ、米田の思考の基底をなす様式が作りあげられていった。

留学から帰国した直後の米田が「我国は西洋の物質文明を輸入して、殆ど西洋諸国と肩を並べるに至ったが、精神文明の輸入を怠っている。西洋精神文明は基督教文明である」として西洋文明の基底をなす観念的要素の啓蒙に努めたのは¹¹、上記の経験からすれば当然の流れであった。ここで西洋精神文明ないしキリスト教文明として念頭に置かれているのは、その宗教倫理によって基礎づけられた高度な社会性である。キリスト教のなかにも「厭世的分子」は少なからずあるにせよ、「現世に神の国を建設せんとする精神」に基づいて「人間の威厳価値を重んじ」、「自由にして活動的」な要素を備えたキリスト教こそが我が国の社会問題を解決するうえで最も重要な勢力であるという¹²。先述した通り、米田の最初の著作は『比較宗教学』の翻訳であったが、その後も折に触れて宗教に関する問題に言及しており、宗教への関心は米田の思考全体を貫く一つの軸であつ

た。

その一方で、京大への着任に前後して活発化する社会学研究においては、先述した宗教と学問の分業という立場のためか、こうした観念的要素のもつ意義が強調されることは少なかつた。たとえば社会学に関する最初の著作『現今の社会学』（一九〇六年）では、社会学に関する学問を大きく「社会実際学」と「社会理論学」に分類したうえで、社会学を後者のなかに位置付けている。社会学を含む「社会理論学」が「社会理法の存在を信じ随ふ」法則定立の学として構想されているのに対し「社会実際学」は技術や政策をはじめ、倫理の問題なども扱う文字通りの「実際学」であり、上記の観念的要素もおそらくはその範囲内に含まれると思われ¹³。この立場は、イチリオ・ヴァンニヤルドルフ・シュタムラーらの法哲学研究に触発されて書かれた論文「批判的法理学ト社会学」（一九一三年）にも貫かれており、米田は法の形成・進化において理想のような観念的要素が重要な役割を果たしていることを認めつつも、理想を「既ニ發達セル事実トシテ見」た場合、それは「決定論的因果論の見地ヨリ研究シ得ル」ものであるという¹⁴。そのうえで、社会学の指導のもとで發達する「法律科学」はそうした「決定論的因果論の見地」からの研究に集中すべきものであつて、「将来ノ發展ノ目標」として「意識的計画的

「ニ成立スル」理想の研究については「社会實際学」の一部門として組織するのが穩当である、としている¹⁵⁾。

一九一一年から一三年にかけての論文に見られる「エネルギー学」は、彼のこの複雑な思考を整理し、あわせて「科学としての社会学」の立場から社会の進化に関する大胆な試論を展開するものであった。その詳細については別稿で取り上げたので、ここではその要点のみを示すに止める。

この「エネルギー学」はドイツの化学者ウィルヘルム・オストヴァルトが提唱した *Engelke*、すなわち心的活動を含む一切の活動をエネルギーの増大・減少・変換といった視角から認識する一元論的世界観を指している。米田はこれを「社会学の尤も重要な基礎の一部分を定立」するものとして高く評価し、純正社会学（社会法則の定立に関する純理論的研究）の主要課題のひとつとして挙げている。「科学としての社会学」の樹立を目指す米田においては、分析の対象を厳密に定義し、それを量的尺度により把握することの必要性が意識されていた。「エネルギー学」はそうした求めに応えるものであったわけだが、この世界観が同時に、利用可能なエネルギーの減少（エントロピーの増大）を自然の側に、それを押しとどめるエネルギーの「節約」を人間および社会の側に振り分け、「節約」を生物本能に基づく根源的な価値とみる価値哲学としての側面を有していたこと

も「エネルギー学」への高い評価に結びついた。「社会化は人類の目的に対して原料エネルギーより有効エネルギーに於ける転換の能率を改良する限りに於て、即ち文化發展の一因素をなすに於いて文化学上重要なものとなるのである¹⁹⁾。「エネルギー学」のこうした立場はまさに、価値や理想といった観念的要素を「既ニ發達セル事実トシテ見」たうえで「決定論的因果論的見地ヨリ研究」する具体例を示すものであった。

こうして米田は社会学を、自然科学を内蔵した社会法則に基づき、「決定論的因果論的見地」を徹底させた学問として受けとめつつ、その確立に向けた模索を開始していた。しかし、このような立論に従って進む限り、同じ時期に精力的に展開されていた「西洋精神文明」に関する議論のように、観念的要素の意義をそれとして取り出し評価することが困難であるの言うまでもない。社会学の立場から価値や理想が取り上げられることがあったとしても、窮極的には価値や理想が生み出される「決定論的因果論的見地」の必然性へと議論は収束していくことになり、ここから「決定論的因果論的見地」に立つこと自体が価値や理想そのものであるという短絡が発生すること、すなわち科学が前提とする一種の合理主義をあらゆる局面において發揮することこそが文化の發展であるという考え（「エネルギー学」）

へとたどり着くことは必ずしも不思議ではないだろう。要するにこの段階では、近代西洋文明を成立せしめた要因を觀念的要素に遡つてとらえ切ることの必要性が自覚され、社会学をそうした文明の所産として正しく認識する一方で、觀念的要素と社会学の関連付けについては未だ十分に考え抜かれていたわけではなく、したがって西洋とは異なる文明に社会学を導入することの意味についても、十分に自覚し得ていなかったのである。

こうした文明論と社会学のすれ違いを克服していく直接的な契機となったのは、彼自身を当事者のひとりとする都市問題・労働問題の深刻化であった。西洋文明の受容が種々の社会的病理を引き起こすという事態に直面したとき、西洋文明の基底にはいかなる価値や理想が前提とされているのか、科学的な立場を徹底させることは、価値や理想の実現を目指して行動し、現実を批判する立場とは永遠に結び合うことができないのか、という問いが米田のうちに浮かび上がることになった。米田の思考において無視し得ない比重を占めていた理想主義的な視角は、そうした問いを必然化したのである。

二 新カント派哲学との交流

第一次世界大戦の戦中・戦後にかけて急速な発展を遂げた日本資本主義とそれに伴う生産活動の合理化は、労働者や都市生活者をはじめとする人々から人間らしい生活を奪い去り、さまざまな病理的現象を引き起こさずにはおかないものであった。米田の表現を借りるなら、「無限的営利心」と「経済的合理主義」が肥大化する一方、それらが奉仕するべき社会的理想が不在であるために「神経衰弱」のような病理が発生しており、ゆえに現代にふさわしい社会的理想の創出が急がれていた²⁰。ところで、この「神経衰弱」という概念は米田の社会問題論にしばしば現れるモチーフであるが、実のところそれは、日本の労働者や都市生活者のあり方を客観的に描写したというものよりは、相次ぐ子女の死や過度の勉強により徐々に精神状態を悪化させていた米田自身の内面における葛藤や価値規範の動揺が強く投影されたものであったと思われる。

神経衰弱がこの時代の流行病であると同時に、自認されることの多い病であったことについては先行研究でも指摘されているが²¹、そこには自己への両義的な態度と、そのような自己と時代精神の重ね合わせの感覚が働いていると言

えよう。「社会学の米田庄太郎といふ先生は〔中略〕その講義では学生たちに筆記させるのに、「我輩は神経衰弱にかかり」といふやうな文句まで入れるので、これにもびつくりした²²⁾。このように米田が神経衰弱を積極的に自認し、それを社会学講義のなかで述べていたことのうちには、自らの社会学研究および日本の西洋化への基本的な肯定と、にも関わらずそれらが米田自身も含む多くの人々の人間性を害していることへの不安が共に表現されていると見るべきであろう。

この時期の米田の思考を見るうえで、『大阪毎日新聞』に掲載された談話「科学の破産」も重要である。この談話で米田は、我々がその経験を通して自明と見なしてきた自然法則が、非ユークリッド幾何学の発展や現代物理学により根底から動揺しつつあることに触れ、数学や古典物理学を手本としてきた社会学もまた行き詰まりを起しているとして述べている。その行き詰まりの内容と善後策は以下のようなものである。

科学の破産は真理とか法則とかを、極めて靜的に解した処に在る、少しも動きの取れないやうに考へたから、ちつとも手も足も出なくなつて了つたのだ。／から云つて来ると善後策も自然と明らかである。今迄の様に、一般の現象を靜的の動きの取れない様な法則とか

原理とかで纏めたり、整理する事を廢して、いくら経験が豊になつて、人間の視野が廣うなつても、決してまごつかない様に、極、融通の利く工合にして置かないといけない。夫には統一の原理の如きものをば、動的なものと考えれば宜しかろう。かくして、初めて、科学は新しき道に進み得るであらう。²³⁾

この認識は極めて複雑なものにとどまっているとはいへ、科学が前提とする一定の構成原理の存在と、その歴史的相対性に着目するものであつた。この認識を裏返してみるならば、社会学のような新しい科学が真に成立するためには、その前提として新しい構成原理が成立していなければならぬという認識となつて浮かび上がる。

それまで断片的に書かれてきた新カント派・新理想主義に関する論文をまとめ、再構成した『晩近社会思想の研究』（一九一九年）が書かれたのは、まさにこのような時期であつた。「帰朝後、殊に京都帝国大学文学部に関係して以来、私の地位を保つ唯一の途は、只益々私自身の實力を養うより他になかつた」という切迫感のもと、米田は社会認識の方法において科学的思考を最も徹底させた学問として社会学を受けとめ、それへの接近を開始したのであるが、その心情においては信仰と結びついた理想主義的な精神が打ち消しがたく根付いていたのであり、神経衰弱によつ

かから「社会主義者のカント化」の動きが生じていることを論じている。

米田は、社会の形成および進化を統一的に把握するためには因果関係に基づく説明だけでは不十分であり、「吾人の意識の内容に於て、吾人自からの努力によつて成就せらる可き或物の観念を含蓄して居ると云ふことは否定す可からざる事実」である以上、理想や価値のような観念的要素を踏まえた目的論的説明が併せて行われなくてはならないと考える傾向が近年強まっていることを挙げるとともに、ルードヴィッヒ・ヴォルトマンに依拠して、「マルクス自身は意識していなかったが」実質的には観念的要素を重視していたことを紹介している。②③ ②④ ②⑤ ②⑥ ②⑦ ②⑧ ②⑨ ③① ③② ③③ ③④ ③⑤ ③⑥ ③⑦ ③⑧ ③⑨ ④① ④② ④③ ④④ ④⑤ ④⑥ ④⑦ ④⑧ ④⑨ ⑤① ⑤② ⑤③ ⑤④ ⑤⑤ ⑤⑥ ⑤⑦ ⑤⑧ ⑤⑨ ⑥① ⑥② ⑥③ ⑥④ ⑥⑤ ⑥⑥ ⑥⑦ ⑥⑧ ⑥⑨ ⑦① ⑦② ⑦③ ⑦④ ⑦⑤ ⑦⑥ ⑦⑦ ⑦⑧ ⑦⑨ ⑧① ⑧② ⑧③ ⑧④ ⑧⑤ ⑧⑥ ⑧⑦ ⑧⑧ ⑧⑨ ⑨① ⑨② ⑨③ ⑨④ ⑨⑤ ⑨⑥ ⑨⑦ ⑨⑧ ⑨⑨ ⑩① ⑩② ⑩③ ⑩④ ⑩⑤ ⑩⑥ ⑩⑦ ⑩⑧ ⑩⑨ ⑪① ⑪② ⑪③ ⑪④ ⑪⑤ ⑪⑥ ⑪⑦ ⑪⑧ ⑪⑨ ⑫① ⑫② ⑫③ ⑫④ ⑫⑤ ⑫⑥ ⑫⑦ ⑫⑧ ⑫⑨ ⑬① ⑬② ⑬③ ⑬④ ⑬⑤ ⑬⑥ ⑬⑦ ⑬⑧ ⑬⑨ ⑭① ⑭② ⑭③ ⑭④ ⑭⑤ ⑭⑥ ⑭⑦ ⑭⑧ ⑭⑨ ⑮① ⑮② ⑮③ ⑮④ ⑮⑤ ⑮⑥ ⑮⑦ ⑮⑧ ⑮⑨ ⑯① ⑯② ⑯③ ⑯④ ⑯⑤ ⑯⑥ ⑯⑦ ⑯⑧ ⑯⑨ ⑰① ⑰② ⑰③ ⑰④ ⑰⑤ ⑰⑥ ⑰⑦ ⑰⑧ ⑰⑨ ⑱① ⑱② ⑱③ ⑱④ ⑱⑤ ⑱⑥ ⑱⑦ ⑱⑧ ⑱⑨ ⑲① ⑲② ⑲③ ⑲④ ⑲⑤ ⑲⑥ ⑲⑦ ⑲⑧ ⑲⑨ ⑳① ⑳② ⑳③ ⑳④ ⑳⑤ ⑳⑥ ⑳⑦ ⑳⑧ ⑳⑨ ㉑① ㉑② ㉑③ ㉑④ ㉑⑤ ㉑⑥ ㉑⑦ ㉑⑧ ㉑⑨ ㉒① ㉒② ㉒③ ㉒④ ㉒⑤ ㉒⑥ ㉒⑦ ㉒⑧ ㉒⑨ ㉓① ㉓② ㉓③ ㉓④ ㉓⑤ ㉓⑥ ㉓⑦ ㉓⑧ ㉓⑨ ㉔① ㉔② ㉔③ ㉔④ ㉔⑤ ㉔⑥ ㉔⑦ ㉔⑧ ㉔⑨ ㉕① ㉕② ㉕③ ㉕④ ㉕⑤ ㉕⑥ ㉕⑦ ㉕⑧ ㉕⑨ ㉖① ㉖② ㉖③ ㉖④ ㉖⑤ ㉖⑥ ㉖⑦ ㉖⑧ ㉖⑨ ㉗① ㉗② ㉗③ ㉗④ ㉗⑤ ㉗⑥ ㉗⑦ ㉗⑧ ㉗⑨ ㉘① ㉘② ㉘③ ㉘④ ㉘⑤ ㉘⑥ ㉘⑦ ㉘⑧ ㉘⑨ ㉙① ㉙② ㉙③ ㉙④ ㉙⑤ ㉙⑥ ㉙⑦ ㉙⑧ ㉙⑨ ㉚① ㉚② ㉚③ ㉚④ ㉚⑤ ㉚⑥ ㉚⑦ ㉚⑧ ㉚⑨ ㉛① ㉛② ㉛③ ㉛④ ㉛⑤ ㉛⑥ ㉛⑦ ㉛⑧ ㉛⑨ ㉜① ㉜② ㉜③ ㉜④ ㉜⑤ ㉜⑥ ㉜⑦ ㉜⑧ ㉜⑨ ㉝① ㉝② ㉝③ ㉝④ ㉝⑤ ㉝⑥ ㉝⑦ ㉝⑧ ㉝⑨ ㉞① ㉞② ㉞③ ㉞④ ㉞⑤ ㉞⑥ ㉞⑦ ㉞⑧ ㉞⑨ ㉟① ㉟② ㉟③ ㉟④ ㉟⑤ ㉟⑥ ㉟⑦ ㉟⑧ ㉟⑨ ㊱① ㊱② ㊱③ ㊱④ ㊱⑤ ㊱⑥ ㊱⑦ ㊱⑧ ㊱⑨ ㊲① ㊲② ㊲③ ㊲④ ㊲⑤ ㊲⑥ ㊲⑦ ㊲⑧ ㊲⑨ ㊳① ㊳② ㊳③ ㊳④ ㊳⑤ ㊳⑥ ㊳⑦ ㊳⑧ ㊳⑨ ㊴① ㊴② ㊴③ ㊴④ ㊴⑤ ㊴⑥ ㊴⑦ ㊴⑧ ㊴⑨ ㊵① ㊵② ㊵③ ㊵④ ㊵⑤ ㊵⑥ ㊵⑦ ㊵⑧ ㊵⑨ ㊶① ㊶② ㊶③ ㊶④ ㊶⑤ ㊶⑥ ㊶⑦ ㊶⑧ ㊶⑨ ㊷① ㊷② ㊷③ ㊷④ ㊷⑤ ㊷⑥ ㊷⑦ ㊷⑧ ㊷⑨ ㊸① ㊸② ㊸③ ㊸④ ㊸⑤ ㊸⑥ ㊸⑦ ㊸⑧ ㊸⑨ ㊹① ㊹② ㊹③ ㊹④ ㊹⑤ ㊹⑥ ㊹⑦ ㊹⑧ ㊹⑨ ㊺① ㊺② ㊺③ ㊺④ ㊺⑤ ㊺⑥ ㊺⑦ ㊺⑧ ㊺⑨ ㊻① ㊻② ㊻③ ㊻④ ㊻⑤ ㊻⑥ ㊻⑦ ㊻⑧ ㊻⑨ ㊼① ㊼② ㊼③ ㊼④ ㊼⑤ ㊼⑥ ㊼⑦ ㊼⑧ ㊼⑨ ㊽① ㊽② ㊽③ ㊽④ ㊽⑤ ㊽⑥ ㊽⑦ ㊽⑧ ㊽⑨ ㊾① ㊾② ㊾③ ㊾④ ㊾⑤ ㊾⑥ ㊾⑦ ㊾⑧ ㊾⑨ ㊿① ㊿② ㊿③ ㊿④ ㊿⑤ ㊿⑥ ㊿⑦ ㊿⑧ ㊿⑨

以上の紹介を通して米田自身が新カント派および新理想主義から多くを学んだことは確実であるが、それは突き詰めれば「マルクス主義が理想主義を加味」する、という一点に帰着するものであった。だが、マルクス主義に代

表される社会の科学的認識と、理想主義に代表される観念的要素の重視は、いかなる形態において接合されるのであろうか。この点に関する米田の掘り下げはまだ全く不十分であり、社会の因果論的分析と目的論的分析の相互関連を一步ずつ確定していくというよりは、両者を本質的には異質なものとしたままで、やや強引かつ図式的に統一しようとするものであった。米田がマルクス主義と理想主義の接合を論じつつも、その理想自体はマルクス主義とは全く無関係に成立するものと見ているのは、以下の引用からも明らかである。「要するにカントは彼の時代の経済的及文化的状態に制限されて、彼の倫理的根本思想、断言的命令の論理的結論を其の時代の自由主義の要求する程度に止めたのであるが、新カント派の哲学者は現代の経済的及び文化的発達の状態に応じて、社会主義の要求する程度にまで、その断言的命令の論理的結論を引き延ばさんとするのである」③①。この問題は『軌近社会思想の研究』から四年後の著作『恋愛と人間愛』（一九二三年）において最も顕著なかたちであらわれている。③②

この著作は、近代における「恋愛至上主義」の広がりにも触れ、それが必然性を有するものであると説くところから始まっている。政治・経済・信仰などあらゆる領域において広がる自由への要求が恋愛の自由へと及ぶことは歴史的

必然であり、また、恋愛の根底には精神化された性欲が存在しているため、恋愛の抑圧は性欲の抑圧へと繋がり「ヒステリー」の原因となる、ゆえに恋愛の価値を高めその自由を求めることは「ヒステリー」を回避しようとする生理的な必然性もある。このように恋愛が価値化されることの必然性を説く一方で、米田は恋愛至上主義への批判を以下のように展開する。人生の意義は恋愛そのものに求めるのではなく、あくまで普遍的文化の発展に貢献することこそ求めねばならない。そこで、恋愛を「人間愛」へと昇華させ、それに沿って現実の恋愛を文化発展上の要求に適用

ものへと改良すると共に、「人間愛」そのものについても普遍的価値とは区別したうえで、個人をして普遍的価値の発展に貢献せしめる原動力としてのみ意義を有することを認識しなければならぬ。では、恋愛から人間愛への昇華はいかにして可能であるのか。米田は一方ではコントの人類教を例に挙げて、果たされない恋愛は人間愛へと転化され得ると主張するだが、他方では、個人的な性欲を根源にもつ恋愛と、社会的な親和力を根源にもつ人間愛の峻別を要求しており、どちらかといえば両者の排他的関係が強調されている。要するに、同書において米田は「恋愛至上主義」の因果論的必然性の分析とは全く別に、恋愛と人間愛、あるいは人間愛と普遍的価値の目的論的關係を論じている

のであり、読むものをして取って付けたような印象を与えずにはおかないものであった。

新カント派・新理想主義との交流を通して、自然科学と社会科学の質的相違や、社会科学と理想主義が相対立するものではないこと、従って自らが確立しようとする社会学は、単に現代社会の因果論的必然性を検証することを目標とするに止まらず、窮極的には理想を実現するための手段であるべきだという確信を得られたことは、米田にとって大きな意味をもっていた。この時期の米田が「神経衰弱」のみならず「女の万引き」「神秘主義の流行」など極めて多様なテーマをとりあげながらも雑多な印象を読者に与えないのは、こうした理想への志向において一貫していることが大きいように思われる。しかしながら、この時点ではまだ理想そのものを社会学の分析範囲のなかにくみ入れられておらず、したがって社会学と理想主義を外面的につなげようとするにとどまっていたと言わねばならない。

三 「日本的学問」と「第三史観」

一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、日本社会は更なる変動に遭遇していた。大衆消費社会の原型が作られる一方で、恐慌による農村の窮乏は論壇の中心的なテーマ

となり、都市と農村の対立が盛んに論じられた。こうした状況を背景にマルクス主義が注目され、流行思想として消費される一方で、同時に戦時下の計画経済を生み出す伏流となっていく。

こうした社会状況の急変に対し、米田が無関心であったとは考えにくい。しかし、この頃になると時事的な発言をほとんど行わなくなっており、一九二二年に大原社会問題研究所の評議員を辞職した際には「これまでは研究の外に社会運動に携はるところもあつたが〔中略〕今後は純研究に没頭」すると述べるなど、自らのアイデンティティを社会学の方法論研究に求める傾向を強めていた。その方法論研究についても、復古主義の強まりによつて急速に自由が失われていると米田は感じており、そうした危機意識は米田をして方法論研究をまとめて一書とすることを断念させた。この危機意識の背景には、『晩近社会思想の研究』において既に見られたマルクスの思想に対する肯定的評価が、この時期の論文ではより前面に押し出されていることと無関係ではないだろう。その点については後述することとして、後期の米田の問題意識が比較的明瞭に示されているものとして、まずは「日本の学問の文化史的意義及び基本的諸典型」(一九三九年)を取り上げてみたい。

この論文の冒頭で米田は、「近来我国に於ては、種々

意味にて我国独特の或は独自の日本の学問を建設せねばならぬという主張が盛んに唱へられてきた」ことに触れ、そうした主張が現れることの意義を明らかにすることが必要であると述べている³⁵。この問題に対して米田は、「日本の学問」の主張が、日本が近代化の過程において取り入れた西洋文化の短所を自覚的に排除して独自の文化を確立しようとする新文化建設運動の一環であると同時に、世界大戦をもたらしした西洋文化そのものの行き詰まりを克服するためにドイツやイタリアでも進行している世界的運動の一環であることを指摘している³⁶。それによつて米田は、「日本的学問」がその一環をなす新文化建設運動は「東亜協同体の基本的文化となり得るもの」であると高く評価する³⁷。

このように「日本的学問」が米田の思考の前面に押し出されてくる背景には無論、時代の動向が深く関わっている。「日本の学問」が即座に「東亜協同体の基本的文化」へと結びつけられる背景には、むしろ米田におけるアジア論の欠落が指摘され得るであろう。しかし、米田は決して偏狭なナショナリズムの立場から「日本的学問」を問題にしているわけではない。そこでは明確に、「日本の学問」の目的は「世界文化」への貢献であること、そして「日本的学問」の基礎となる「新日本哲学」は、日本思想を「日本化されたる西洋哲学」によつて精鍊することを得られるもの

であることが述べられている。³⁸ 要するに、西洋の学問が問題としたものを「日本的学問」もまた問題とし、その地盤のうえで議論を進めていかなければならないというのが米田の立場であった。

同様の立場は、公刊されたものとしては最後の論文となる「我国社会学者の今日の急務」(一九四〇年)においても強調されており、今日の日本の社会学者はもはや欧米の社会学理論を学ぶだけでなく「近代社会学の最も根本的な問題」の批判的研究に取り組むことが必要であること、それによって「欧米の社会学界に対して日本の貢献」をするべきであることが述べられている。³⁹ しかし、「近代社会学の最も根本的な問題」とは何であり、「欧米の社会学界に対して日本の貢献」をするとはどのような事態を指すのだろうか。ここで米田が注目するのは、「科学としての社会学」と「社会哲学」の区別および関係づけという問題である。米田はまず、近代社会学は社会哲学からの分離を通して「科学としての社会学として誕生」したが、「科学と哲学との区別及び関係が、今日も尚正当に又判然規定されて」おらず、また「科学の根本的二分類としての自然科学と非自然科学」の区別や関係も明確でないため、「社会学を真に厳密なる科学として基礎付け確立し、夫れと社会学との区別及び関係を正当に又判然規定する為には、新し

き学問論を建設しなければならない」と述べる。⁴⁰ こうした問題提起に続けて、米田は自らの考えとして、科学は「吾人の経験的現実を経験的方法によつてあるがままに研究」するものであり、「おのづからそのまま世界的に受け容れられ、世界的に普及し得るもの」であるが、これに反して哲学は「現実の奥に儼存すると確信せざるを得ない絶対的意味或は価値及びその基体としての絶対的存在を、超経験的或は先験的方法によつて思索し思弁」するものであり、その絶対性は「世界観的人格典型」ないし「諸民族の夫々の民族精神によつて根本的に規定されて居るもの」として、根本的には民族的な学問である」と述べている。⁴¹

このように述べてしまうと、「新しき学問論」というにはあまりに単純すぎるという印象を受けるかもしれない。しかしその前史には、価値や理想を社会学のなかにいかに位置付けるかをめぐって試行錯誤を繰り返してきた、彼の長い方法的模索の歴史があったことを見逃すべきではないだろう。価値や理想の問題は「エネルギー学」のように自然法則を内蔵した社会法則のうちに解消されるか、そうでなければ超歴史的・超空間的な普遍的観念とみなされてきた。この時期に至つてようやく、価値や理想は「世界観的人格典型」や「民族精神」といった媒介項の発見により、歴史的事実物として対象化され始めたのである。

社会学方法論がこの時期に大きく進展することになる背景には、米田がそれに専念するようになったという事情もさることながら、この間に「フォイエルバッハ・テーゼ」などの文献が紹介されたことで初期マルクス研究が大きく進展し、そこからより具体的な手掛かりを得られるようになったことが関係している。それを示しているのが「マルクスの認識論原理（フォイエルバッハに関するテーゼに於ける）」（一九三四年）である。

「フォイエルバッハ・テーゼ」のうち、米田が検討の対象とするのは第一・第二テーゼである。周知のようにこれらのテーゼでは、従来の唯物論が事物や現実を客体としてのみ捉え、人間本来の感性的・主体的性格をもって捉えていなかったことが批判され、それに代わり実践を通して真理に到達する新しい唯物論が提唱されている。これを米田は「観念論の活動主義の思想を、精神的なるものから感性的なるものに転化することによりて、之を伝来の唯物論に結び附け〔中略〕全く新しき哲学的の一方針を立てた」ものとして、これを高く評価する⁴³。そしてこうしたマルクスの試みを、活動主義 Aktivismus、現実主義 Aktualismus、実際主義 Pragmatismus を総合したものと考え、その系譜上にニーチェやベルクソン、さらにはレーニンによって徹底的な批判を受けたマツハを位置付けることで、現代の

唯物論がいかにマルクスと異なっているかを強調するのである⁴⁴。

もつとも、米田はマルクスにおいて活動主義が「精神的なるものから感性的なるもの」へと転化したことを正しく認識しつつ、「それで果して全然観念論的要素を含まない純粋な唯物論が建設し得られるであろうか」と疑問を呈し、活動主義を再度「精神的なるもの」の側へと引き寄せようとする。すなわち精神を持った主体を起点とする認識論としての再構成である。米田の見るところ、「マルクスが行動の主体と見る感性的人間に於ても、やはり其の感性的存在の奥底に、或は其の感性的存在と相伴ふて、人間の精神的存在をも認めなければならぬ」のであって、そう見ることによってマルクスの哲学を「現段階の労働者の革命運動の世界観」から「人間全体に対する問題」へと押し広げていくことが可能になると米田は述べている⁴⁵。

こうしたマルクスの批判的検討を通して生み出されたのが、一九三五年に立てつづけて出された「第三史観の概念（上・下）」「第三史観の可能性（上・下）」「第三世界観的人格典型」の五論文であった。おそらくは体調の悪化により途中で打ち切られているものの、晩年の米田がその方法論の集大成を期して書いたものであった。「第三史観」の名称は高田保馬の『階級及第三史観』（一九二五年）などの

著作に由来するものであるが、社会変動の中心要因を人口変動にみる立場から「第三史観」を論じる高田に対し、米田は「観念論と唯物論を論理的に結合」する世界観という全く異なる定義を与えている⁽⁴⁷⁾。しかし、それは必ずしも観念論と唯物論の否定を意味するわけではない。それぞれの世界観はその背景に「其の人の全人格性の奥底から生ずる深大な世界観的要求」が控えており、「第三史観」もまたそれを求める世界観的要求の存在と切り離して考えることはできないと考えられていた⁽⁴⁸⁾。先ほど「日本の学問」の問題に触れたとき、米田がそこに自らの立場から積極的な意味を付与したことを指摘したが、この場合にも「第三史観」に対して、世界観の複数性を重んじる多元主義的な意味が付与されていることを見逃すべきではないだろう。

「第三史観」の特徴は、「物質の原本性」と「物質の自己運動性」が承認されつつも、物質には還元不可能な次元に「世界観的人格典型」と呼ばれる精神の層が想定されている点である⁽⁴⁹⁾。この論点のもつ重大さに比して米田の論述は簡潔に過ぎるものであるが、基本的には先のマルクス論を踏襲しつつ、感性的作用の基底に、「個人的主観性」と「論理的客観性」のいずれとも異なる「世界観的人格典型」を想定し、その形成過程を問題とする構成になっている。

米田は「世界観的人格典型」の構成要素として民族・階

級・職業・地理的環境を挙げる一方で、それらと個性の融合が形成の契機となることを強調する⁽⁵⁰⁾。そこには、抽象的かつ普遍的な人間精神一般の考察に終始するのではなく、具体的であるがゆえに歴史的考察の対象となりうるものとして「世界観的人格典型」を捉えようとする狙いが込められているように思われる。だが、「物質の原本性」と「世界観的人格典型」は米田が言うように両立可能なのであるか。米田は「両因素は何れも他に還元されない独立なものであるとしても、密接に相互的に作用し合ふものである以上、根本的には両因素を総合する根元的な或物が存在」しており、「両因素は根元的な唯一真實在の根本的分化にして、かくて密接に相互的に作用し合ふのであると考えざるを得ない」と述べているが、研究の方向性として生命哲学や西田哲学の存在が示唆されるのみで、具体的には論じられていない。こうした点から、米田にとって初期マルクスおよび第三史観の研究は結局のところ一種の問題提起に留まったとも言い得るであろうが、その反面、認識の主体である自己と認識の対象である現実の世界を対比的に捉えるのではなく、世界との必然的な関りのなかにある自己を捉えようとする方向に大きく踏み出したことは注目に値するであろう。

「第三史観」論が途中で途絶したこともあり、ここで示

された論点に則して米田がどこまで進んでいったのかについて明確な答えを得ることは難しい。「世界観的人格典型」の構成要素の一つとして挙げられるに過ぎなかった民族の問題が時代とともに比重を高めていったことや、社会学としての「第三史観」論が、厳密な「科学」として社会学を確立しようとする意志と裏表の関係にあったことを、わずかに指摘し得るのみである。特に後者は「社会学を排斥して、只科学としての社会学のみを建設せんとする企では、総て結局は社会学を社会学化するに至るものである」とも考へて居る」と述べられており、無自覚な「哲学」のもたらす弊害とその自覚化の必要が強く意識されていたと言えよう。

おわりに

高田保馬は米田から「学者の仕事は究極に於て、其固有なるものの創始でなければならぬ」という教えを受けたと述べているが、米田自身、他人の学説をそのまま伝えることはほとんどなく、そこに自らの見解を付け加えることを怠らなかつた。米田のうちにおいては、西洋人とも共有する普遍的な問題に取り組み、その成果を世界に問うことの重要性が常に意識されていたが、そこには長期の留学とキ

リスト教への信仰という個人的な体験のみならず、西洋への挑戦という、明治前半に生まれた人々に共通する時代精神が認められるだろう。社会学という、地味だが普遍的な問題が米田の一貫した関心事であったのに対し、彼に続く世代がローカルな問題の研究へと接近し、結果として米田の研究が半ば忘却されたことは、以上のような文脈から理解すべきであると思われる。

米田の研究の終局的な目標は「科学としての社会学」の確立に置かれていたが、自らの関心をひたすらに掘り下げていく彼の愚直な研究姿勢は、社会学の範囲外にはみ出すかに見える価値や理想といった観念的要素を焦点化させていった。新カント派はそうした観念的要素を学問的に扱う道筋を示すかに見えたが、米田はそれに満足せず、やがて初期マルクスの思想などを頼りに「第三史観」という独自の社会学の構築へと向かっていった。とはいえ、米田の社会学はなお極めて抽象的で、歴史的・経験的存在としての価値や理想を十分に対象化できておらず、従って容易に超歴史的・超経験的存在と一体化していく可能性を秘めていた。最晩年に「民族精神」の存在が前景化されてくるのは、米田のそうした弱点の表れにほかならないと言えるだろう。だがしかし、思想の輸入業者となることに甘んじず独自性の確立に向けた愚直な努力を続けた米田の研究過程

のなかには、戦前の社会学史を表面的に見るだけでは学びえない強烈な示唆が含まれていると思われる。

注

- (1) 河上への影響については、山之内靖「社会科学の方法と人間学(下)」(『思想』五六六号、一九七一年)八〇、八二頁を、恒藤への影響については、広川貞秀『恒藤恭の思想史的研究』(大月書店、二〇〇四年)一一一〜一二二頁を参照。
- (2) 高田保馬「米田博士の追憶」(『社会学研究』二卷一號、一九四八年)一〇九頁によると、高田は福田からこの言葉を関東大震災の直後の時期に聞いている。
- (3) 奈良県立同和問題関係資料センター編『米田庄太郎——人と思想』(奈良県教育委員会、一九九八年)、横井敏郎「戦前日本の社会学者米田庄太郎著作目録・略年譜・参考資料・書誌」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第七七号、二〇〇一年)。
- (4) 代表的な成果としては、中久郎「米田庄太郎——新総合社会学の先駆者」(東信堂、二〇〇二年)と、広川禎秀「米田庄太郎の社会思想及び新カント派の研究」(大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会「近代大阪と都市文化」(大阪市立大学文学研究科叢書第四卷)「清文堂、二〇〇六年)、田中和男「大原社会問題研究所の設立と米田庄太郎」(同志社法学』五九卷二号、二〇〇七年)などが挙げられる。
- (5) 以上は、前掲奈良県立同和問題関係資料センター「米田庄太郎——人と思想」、前掲横井「戦前日本の社会学者米田庄太郎著作目録・略年譜・参考資料・書誌」による。
- (6) 米田庄太郎「聖徒心理の研究に就て」(『神学之研究』二卷一號、一九二〇年)二三頁。
- (7) (無署名)「京都片々」(『改造』三卷五号、一九二一年)七六頁に、米田の談話として引用されている。
- (8) ヤマハ創業者の山葉寅楠が一八九八年に技術視察のためニューヨークを訪れた際の日記に、当初は中瀬古六郎(米田と同じ奈良県出身で、のちの同志社普通学校教頭・同志社女学校長)が通訳を務めたが、途中で米田へと通訳業務が引き継がれたことが記録されている(山葉寅楠「渡米日記」、山葉寅楠銅像建設事務所編『山葉寅楠翁』一九二九年)。
- (9) 飯沼和正・菅野富夫「高峰讓吉の生涯——アドレナリン発見の真実」(朝日新聞社、二〇〇〇年)一八八頁。米田の自然科学に対する関心は当時から広く知られていたらしく、やや誇張されて「仏国では大学の微生物学教室に通って研究に没頭し、講師の顕微鏡下に発見された最近は一二に止まらぬ」などと噂されていた(無署名「京都大学の人々」、『解放』二卷一〇号、一九二〇年、五七頁)。
- (10) 米田庄太郎「仏蘭西の社会党」(『労働世界』七卷三

- 号、一九〇三年)一〇頁。
- (11) 一九〇三年に同志社公会堂で米田が行った朝礼の要旨(同志社教会史編集員会編『同志社教会一九〇一—一九四五』日本キリスト団同志社教会、二〇〇一年、三七頁)。
- (12) 米田庄太郎「我国の社会問題と基督教」(『開拓者』五卷九号、一九一〇年)二六頁。この翌年に書かれた「現代の文明と農業」(『産業組合』六三・六四号、一九一一年)においても、キリスト教への言及こそないが、現代文明の精神を人間の活動性および自由の拡大として把握する視点が貫かれている。
- (13) 米田庄太郎『現今の社会学』(私立岡山県教育会、一九〇六年)三一頁。
- (14) 米田庄太郎「批判的法理学ト社会学(二)」(『京都法学会雑誌』八卷三号、一九一三年)一二七頁。
- (15) 同上、一二八—一二九頁。
- (16) 猪原透「大正期社会思想史における米田正太郎——エネルギー一元論への評価を中心に」(『史創』六号、二〇一五年)。
- (17) 米田庄太郎「オストワルト氏の文化学と力学的社会学の發達」(『芸文』二卷八号、一九一一年)九六頁。
- (18) 米田庄太郎「社会学の觀念の批判及樹立」(『日本社会学年報』四・五合冊号、一九一三年)五一—七頁。
- (19) 米田庄太郎「オストワルト氏の文化学 Kulturlogie と力学的社会学の發達」(『芸文』二卷六号、一九一一年)四九頁。
- (20) 米田庄太郎『現代文化人の心理』(改造社、一九二一年)。
- (21) 山崎正和『不機嫌の時代』(新潮社、一九七六年)など。
- (22) 一九二三年に京大で行われた講義を受講した田中美知太郎の証言(田中美知太郎『時代と私』文芸春秋、一九七一年、一七一頁)。
- (23) 「科学の破産(下) その善後策如何 京大講師 米田庄太郎氏談」(『大阪毎日新聞』一九一九年七月二八日付)。
- (24) 米田庄太郎「ドーマン師」(教会時報社編『アイザック・ドーマン師追悼録』教会時報社、一九三三年)二〇頁。
- (25) 米田庄太郎『晩近社会思想の研究』(弘文堂書房、一九一九年)緒言一六頁。
- (26) 同上、三〇頁。
- (27) 同上、四六—四七頁。
- (28) 同上、四四頁。
- (29) 同上、一九二頁。
- (30) 同上、一七三頁。
- (31) 同上、一五三—一五四頁。
- (32) 米田庄太郎『恋愛と人間愛』(弘文堂書房、一九二三年)。

(33) (無署名)「社会運動は廢めて／今後は純研究に」(『大阪朝日新聞』一九二二年一月二四日付)。詳細については、前掲田中「大原社会問題研究所の設立と米田庄太郎」を参照。

(34) 高田保馬は一九三四年九月に米田のもとを訪れた際の会話について次のように書き残している。「社会的なものを考察の対象として研究をつづけて来た限り、何人もあてがはづれ、見方が誤つてゐた、と思はぬものはないであらう。(中略)私は此の九月に九州の郷里から京都に入るとき、此の思想上の焦燥の為に嘗て知らぬ寂しさを抱いて来た。しかしその夜米田博士をおたづねしたところが、先生もまた同様の気持になやむことを話された」(高田保馬『貧者必勝』千倉書房、一九三四年、七五頁)。なお、これに先立つ一九二五年には、京都学連事件で教え子のひとりである淡徳三郎が検挙されている。

(35) 米田庄太郎「日本の学問の文化史的意義及び基本的諸典型」(『経済論叢』四八卷一号、一九三九年)二一―二二頁。

(36) 同上、二二―二六頁。

(37) 同上、二五頁。

(38) 同上、二六頁、三五頁。

(39) 米田庄太郎「我国社会学者の今日の急務」(『社会学』(日本社会学年報)八輯、一九四〇年)二六頁、二八頁。

(40) 同上、二七―二八頁。

(41) 同上、二八―二九頁。

(42) 米田庄太郎「マルクスの認識論原理(フォイエルバッハに関するテーゼンに於ける)」(『経済論叢』三八卷一―号、一九三四年)五〇頁。

(43) 同上、五一―五五頁。

(44) 同上、五〇頁。

(45) 同上、六二頁。

(46) 同上、六一―六二頁。

(47) 米田庄太郎「第三史観の概念(上)」(『経済論叢』四〇卷二号、一九三五年)一八頁。

(48) 米田庄太郎「第三史観の概念(下)」(『経済論叢』四〇卷三号、一九三五年)五三頁。

(49) 米田庄太郎「第三史観の可能性(上)」(『経済論叢』四〇卷四号、一九三五年)一一―一二頁。

(50) 米田庄太郎「第三史観の可能性(下)」(『経済論叢』四〇卷五号、一九三五年)五一―五五頁。

(51) 米田庄太郎「第三世界観的人格典型」(『経済論叢』四一巻二号、一九三五年)五七頁。

(52) 前掲米田「第三世界観的人格典型」五六頁。

(53) 前掲高田「米田博士の追憶」一一―三頁。

(立命館大学非常勤講師)